FRONT RUNNERS

竹村さんは占いにコンピュータも導入

タロットカードの読み方の勉強会

ICOTで設計した第5世代AIマシーンの前に立つ本池さん。

クローン・コンピュータ誕生間近か？

本池祥子　松下電器産業技術本部システム東京研究室

カタ、カタ。カタ、カタ、カタ。キーボードのこの音を聞いただけで「俺には関係ない」と思う人が多い。が、そういった御仁向けのコンピュータが開発されつつあるという。

日常会話レベルでコンピュータに話しかけ、相談に乗ってもらう――そんなコンピュータ開発が、通産省と民間8社による共同プロジェクト・ICOT（イコット）（新世代電子計算機技術開発機構）で行われている。

ここに登場していただいた本池さんは、「コンピュータに人間の言葉を話させるための思考法作りをしている」そうだ。

つまり、まず人間が物をどう考え、それを組み立てるのかを分析。次にその思考回路をコンピュータに覚えさせる。簡単にいえば、人間（この場合は本池さん）の考え方や発想パターンを持ったコンピュータを作り出そうというのである。

いまのところは研究段階で「まだ発表できるものではない」とお茶を濁すが、もしこのコンピュータが完成すれば、もう一人の本池さんが誕生。さらに将来は、作った人によって様々な性格のコンピュータができることになる。ウーン、自分と同じ考えのコンピュータが巷にいっぱい存在するとなると、ちょっと複雑だ。

当たるも八卦、占いで占い占いをビジネスに!?

竹村亞希子　占いの玉手箱社長

「占いなんて女子供のもの」と決めつけてはいけない。現代は就職・転職を決定するために、大学生やサラリーマンが占いに殺到する時代なのだ。その意味でまさに時流に乗った新企業が、名古屋にある「占いの玉手箱」社だろう。

「最初は2000円を元手に会社まわりから始めたんです。1000円は名刺代、あとの1000円は交通費（笑）。占いは口コミで広まるものですから、イベントで使ってもらうのが一番手っとり早いと思ったわけ」（竹村亞希子社長）

そこで集まった80万円を資金に「占いの玉手箱」社を設立した。それが8年目の現在、ファッションビルに4か所の占いコーナーを常設、土日に集中するイベントに対応するため28人のスタッフを抱えるまでになったのである。最近はただ占うだけでなく、"開運観葉植物展"のように展示物に占いの要素を加えたイベント企画を立案したりもして、事業を順調に拡大しているという。

社長自身「事業の節目には必ず占って決めた」というが、"当たるも八卦、当たらぬも八卦"の占いにこれだけ人が集まるとは、一体世の中どうなってんでしょうかネ。